

37. 高知県沖ノ島集落における自然環境との共生手法に関する調査研究
 ～集落空間構成と干棚の使用、所有、配置について～

0810920072 中原章裕
 指導教員 市川尚紀 講師

沖ノ島 母島集落 弘瀬集落 空間構成 干棚

1 序論

1.1 研究の背景、目的

現在、日本には約 6300 の漁村集落が存在している。漁村集落は、条件的不利な地域に立地し、その特有の地理的要因により漁村集落は独特な文化や建築形態が形成される。高知県宿毛市沖ノ島には、他の漁村集落には無い「干棚」という建築的特徴がある。この干棚は人々が自然を感じる場、コミュニケーションをとる場など島民の生活に強く影響していると思われる。そこで干棚に着目して、弘瀬集落と母島集落の立地条件、集落の空間構成と干棚の使用手法、所有者、配置構成を調査する事で、それぞれの集落でどのような暮らしの知恵があるのか把握することを目的とする。

1.2 研究方法

表 1 調査概要

対象	実測調査	ヒヤリング調査	観察調査
母島集落 弘瀬集落	・干棚の寸法 ・干棚の配置 ・民家の間取り ・集落内の風速	・干棚の使用手法 ・干棚の所有者	・各集落の空間構成 ・干棚と日射の関係
期間	2011年6月24～25日、11月10～14日		

2 調査地概要

沖ノ島は高知県の南西部に位置する宿毛市にある高知県唯一の有人離島であり、気候は太平洋岸気候に属している。島は標高約 404m の妹背山が中心となっていて、至る所に断崖や急傾斜地が見られ平地は少ない。島には、母島集落、弘瀬集落、長浜集落、古屋野集落、久保浦集落の大小 5 つの集落がある。また、島独自の風物詩で、野菜や魚などを干し、夏場は食事をしたり涼んだり様々な形で限られた空間を有効に活用する干棚がある。



図1 (左) 沖ノ島の位置 図2 (右) 沖ノ島集落の配置図

3 集落の空間構成

3.1 母島集落

母島集落は妹背山の急斜面な谷間にある。生業は釣りや海水浴客など観光客を対象とした渡船や民宿、農業である。民家は島内に 80 軒あり、39 軒が居住されている。

狭い地域に集落が立地しているため、民家が密集して建っている (図 3)。そのため石垣や壁で防風対策をすることができず、生活道は民家のすぐ横を通っていた。民家と民家が並んで防風対策を取っているため、風速は集落内では半減する。

母島集落の民家は玄関を入ると正面に 2 畳間、その奥に居間という配置になっている (図 5)。そして、その周囲に台所などの生活スペースが配置される。民家は、家の短辺方向を海側に設け、開口部を少なくし天井高を約 2m と低くすることで防風対策をとっていた。

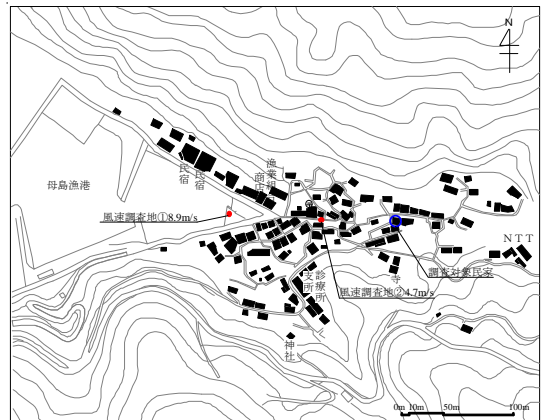


図 3 母島集落配置図

3.2 弘瀬集落

弘瀬集落は妹背山の緩やかな谷間にあり、生業はサンゴ漁や落花生、サツマイモなどを作る農業を行っている。集落に民家は 86 軒あり、45 軒が居住されている。

妹背山の比較的緩やかな谷間にある弘瀬集落では民家が広域にわたって建てられており、各々の民家に十分な建築面積が確保できる (図 4)。そのため、民家が密集して建てられていない。風速は集落の入口と集落内では、ほぼ変化しなかった。各々の家は防風のため、石垣や壁に囲まれていた (図 6)。

集落の民家は海側に壁や蔵を設けて開口部を少なくし、

防風をしている家が多かった。また、天井高を約2mと低くすることにより、防風対策をしていた。

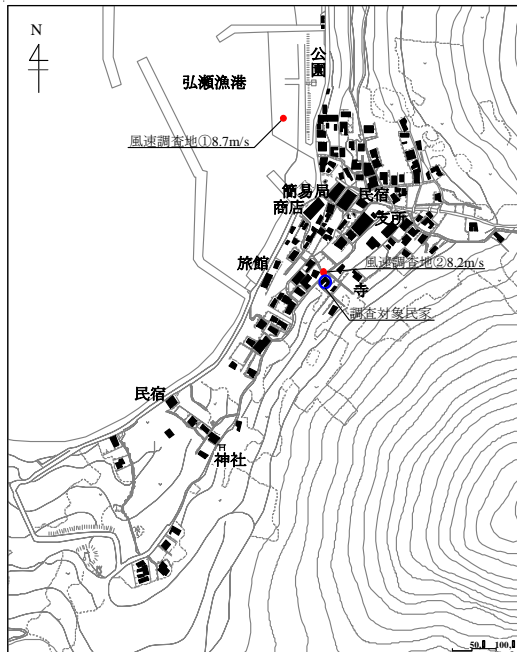


図4 弘瀬集落民家配置図

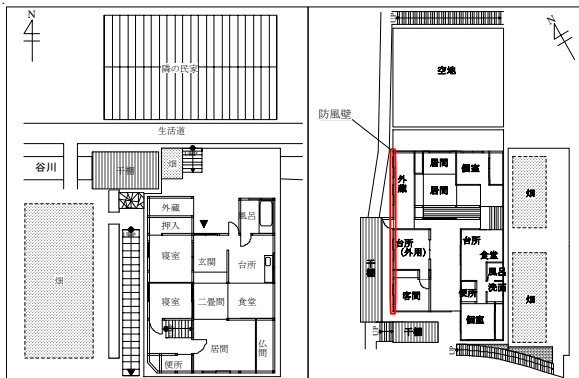


図5 母島集落民家平面図 図6 弘瀬集落民家平面図

3.3 立地条件の違いとコミュニケーションの誘発

弘瀬集落では防風対策として民家が石垣や壁に囲まれており、生活道と民家の間に壁があるため、コミュニケーションは誘発されにくい。母島集落は民家が密集して建つことで防風対策を行っているため、生活道と民家の間に壁がなく生活道を歩いても庭先を歩いている感覚で自然と住民と話をすることが多く母島集落の方がコミュニケーションは誘発されやすいと考えられる。

4 干棚

4.1 干棚のつくり

竹製だと3~4年毎に造り変えなければならないため、現在では竹製の干棚は母島集落、弘瀬集落共に少ない。そのため、ほとんどが塩化ビニル製のパイプを使っている物が多い。しかし、干物を作るには、塩化ビニルより竹製の方が乾きがよく、風情を楽しみたいという理由で現在でも竹製の干棚を使用している人がいた。

4.2 干棚の使用法

干棚は漁で取った魚を干すための場、農業で作った野菜を干す場として使用されていた。干物を作るだけでなく布団や洗濯物、食器を干すためにも使用されており、夏場には住民が集まって食事をするコミュニケーションを取る場となり、共用のスペースとして使用されている。

4.3 干棚の配置と所有

母島集落では民家が密集している谷底付近は、ほぼ全てが谷川の上に干棚を設けて、公有地に配置していた。母島集落では、家屋と隣接するタイプAが最も多かった。母島集落では、密集して家が建てられているため、干棚を設ける敷地を私有地に確保することが困難であることが要因である。

弘瀬集落でも干棚は、タイプAが最も多かった。弘瀬集落はなだらかな谷間に集落があり、各民家に十分な敷地が確保されていた。そのため、干棚も私有地に建てられている配置が多かったと考えられる。

配置	干棚の配置タイプ		
	タイプ A 家屋と隣接	タイプ B 道路を挟む	タイプ C 家屋の間にある
母島	32	25	3
弘瀬	40	15	2

図7 干棚の配置タイプ

表2 干棚の所有について

所有	公有地個人所有	私有地個人所有	公有地共有
母島	32	28	2
弘瀬	16	39	2

5 まとめ

- ①母島集落では急斜面で狭い場所に民家が密集して建ち防風対策を行っていた。そのため生活道が民家のすぐ横を通り、コミュニケーションは誘発されやすいがプライバシーの面では問題があった。弘瀬集落では緩やかな斜面に広域にわたって民家が建っている為、石垣や壁で囲む事によって防風対策を行っていた。そのため生活道と民家の間に壁があり、コミュニケーションの誘発はされにくいがプライバシーは守られている。
- ②干棚は、母島集落では公有地に多く立地しているが弘瀬集落では私有地に多く立地していた。配置場所は、両集落共に家屋と隣接しているタイプが最も多かった。
- ③使用法は普段は個人用に使っているが、夏場などはご飯などを一緒に食べる共用として使用されていた。
- ④母島集落は各民家に十分な敷地が確保できないため、干棚を個人で所有するために公有地を使っていた。弘瀬集落では風通しがよく、日当たりのよい場所に干棚を配置するため公有地を使用している干棚もあった。

参考文献

- 1) 伊藤昌明：高密度住空間における屋外空間のしつらえに関する研究
日本大学大学院修士論文、2002.3
- 2) ゼンリン住宅地図 高知県宿毛市、ゼンリン、2011.5